
天国からのラブレター

空牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国からのラブレター

【Nコード】

N1480B

【作者名】

空牙

【あらすじ】

彼女との運命の出会い、別れ、そして現在。今の忙しい社会が忘れたやさしさ、思いやりそんなものを教えてくれた彼女との過ごした日々、究極のラブストーリーここに完成。

第1話

僕が実際体験した話を小説化してみました。

あれは2000年4月高校3年になって間もなくでした。僕は春の風に吹かれながら放課後の町を特にあてもなく自転車をこいでいた。町の交差点で信号待ちをしていたら後ろから女性の声がした。

「あの……。すみません」

振り替えるとそこに20代半ばくらいの若い女性が立っていた。僕は答えた。

「ん？どうかしたの？」

「若葉病院はどうやって行けば良いのですか？上京してきたばかりで道に迷っちゃって」

と聞いてきた。僕は特にやることもなく暇だったので

「あ、若葉病院ならここからだとかわりとわかりずらいから案内しますよ。」

と答えた。自転車を降りて二人で肩を並べて病院の方向に歩きはじめたが、長い沈黙が続いた。このままではまずいと思い僕は口を開いた。

「若葉病院に行くってどこか悪いんですか？」

「いえ、来週から若葉病院で働くんです。」

「え！？看護婦さんなの！？」

「ええ、でも高知から出てきたばかりでまだこっちに友達もいないし勤務前に道を調べようと思ったら迷っちゃって」

そんな会話をしながら歩いていたら病院の前に着いた。

「ここが若葉病院だよ。これからどうするの？」

「道案内、ありがとう。出勤は来週だから病院までの道も覚えて、ブラブラ散歩しようかなと思って。あの……。もし時間があるなら道案内のお礼にお茶でも一緒にいかがですか？」

「ええ、良いですよ。あの、名前聞いても良いですか？あ、僕は瀧澤真と言います」

「真さん。私は井上梨紗って言います。年は26歳で真さんより年上だけど梨紗って呼んで。」

自己紹介もそこに喫茶店に入りお互いの趣味や生活の話をして時間は流れて別れる時間になった。

「今日はどうもありがとう。すごく楽しかった。また会ってもらえないかな？色々な場所に案内してほしいの。」

「うん、もちろん良いよ。」

こうしてこの日は連絡先を交換して別れた。これが僕と梨紗の出会いだった。

第2話

それから休日が会う日は僕達は会うようになった。最初は彼女の希望通り町の案内を中心としたデートになった。彼女と過ごす休日はまるで何もかもが輝いてみえるようだった。次第に僕は彼女の優しく明るい人柄に引かれていった。

月日は流れ8月の花火大会の日僕はある覚悟を胸に抱いて彼女との待ち合わせ場所の公園に向かった。待ち合わせにやってきた彼女の浴衣姿は眩しく今でも脳裏に焼き付いている。日が暮れて会場に向かったがかなりの混雑だったため僕達は花火の会場から少し離れた神社から見ることにした。辺りは花火の音だけで静まり返っていた。

僕は今がチャンスと思い梨紗への気持ちを伝えることにした。

「あのさあ、梨紗、大事な話があるんだけど…」

「何? どうしたの? まじめな顔をして」

梨紗はいつものように無邪気な笑顔を見せていた。

僕は思い切って気持ちを伝えた。

「梨紗のことが好きだ。ずっとそばにいたい…」

彼女は驚いたようであらう沈黙が続いた。

すると、彼女は硬直した僕の手の上に手を重ね口を開いた。

「良いよ。一緒にいましょう」

その瞬間、梨紗僕の唇に唇を重ねてきた。初めてのキスは一瞬なのに時間が

止まったように長く感じた。

それからさらに親密になっていった。お互いの夢の話もした。

「ねえ、真は高校卒業したら何するの? 将来何やりたいの?」

「そう言えば梨紗にはまだ言ってなかったね。僕は留学するんだ。

オーストラリアに。英語が好きだからさ、もっと勉強して話せるようになりたいんだ。」

そして海外で働きたいね」

「留学！？すごおい。海外で暮らすなんて考えたことなかったよ。真はえらいなあ。」

自分のやりたいこと見つけて。でも海外に行ったら離れ離れになっちゃうね…」

そう言うとき彼女は寂しそうにうつむいた。

僕は後ろから彼女を抱きしめて言った。

「オーストラリアから帰ってきたら働き始めたら一緒に暮らそう。待っててくれるかな？」

彼女は目を潤ませ僕を見た。

「うん、待ってる。勉強しに行くんだもん。真だって頑張ってるんだから」

私ばかりメソメソしたらいけないね。帰ってきたらオーストラリアの話一杯

聞かせてね。そしていつか私をオーストラリアに連れて行って。」

僕は迷わず

「もちろん、約束するよ。」

そして彼女はバッグから何かを取り出した。

「これ、ちょっと早いけどクリスマスプレゼント。気に入ってもらえたら

嬉しいけど…」

渡された袋を開けてみるとそこには手編みのマフラーが入っていた。「マフラーだ！！ありがとう。しかも僕好みのデザインで気に入ったよ。」

あ、でも僕はまだ用意してないんだよな。」

「そんな、全然気にしなくて良いよ。私が勝手にあげただけだし。」

「いや、そういう訳にはいかないよ。そうだ、これから買いに行こう。」

何がほしい？」

そう聞くと彼女は照れながら

「二人おそろいのアクセサリ：」

と答えたのでそれほど高いものは買えないがおそろいのイルカのペ
ンダントを

買った。

それから、彼女を寮まで送って行ったのだが途中で彼女がめまいを
起こして崩れ落ちそうになった。僕は慌てて抱きとめた。

「梨紗！？大丈夫か！？どこか悪いのか！？」

彼女は自力で立つと

「大丈夫、少し疲れたただだから帰って休めば元気になるから。心
配かけてごめん。」

彼女のことは気になったが寮の前まで見送ってその日は別れた。

その時僕はまだ気がついていなかった。彼女の身体に悪魔が忍び寄
っていることを・・・。

第3話

―2001年―

年が明け僕の出発まで一ヶ月を切った。初めて一緒に新年を迎えた彼女と

初詣に行った。

「梨紗、どんなお願いをしたの？」
僕が聞くと

「え、内緒だよ。なーんてね。真が元気に帰ってきて、真のお嫁さんになれるように。
ってお願いしたの。真は？」

「僕も一緒だよ。梨紗と結ばれるようにって、お願いしたの。」
それから、限られた時間で僕達は愛を育んで行った。

そして1月30日、僕はオーストラリアに発つ日になった。

成田空港に見送りに来てくれた彼女は必死に涙をこらえて笑顔を作っていた。

僕も必死に泣きたいのをこらえた。

彼女を抱きしめて

「僕のこと信じて待っていてくれ。約束は必ず果たすから。帰ってきたら

一緒になろう。」

「私はずっと待ってるよ。寂しいなんて思わない。だって心はいつも一緒だもん。

手紙もいっぱい書く。」

二人でクリスマスに買ったペアのネックレスを交換して彼女に背を向けて

オーストラリアへ向かった。

一体何時間寝たのだろう。気がついたらそこは未知の世界だった。

暑い

南国に來たようだった。

「ああ、着いたんだ。」

飛行機を降りて、迎えに来ていたホストファミリーと家に向かった。家に行く前に

切手とレターセットを買ってそれから家に向かった。

着いて、挨拶もそこに彼女に手紙を書いた。

ここから、新しい生活と遠距離恋愛がスタートした。

手紙は一週間に一通は届くペースで届いた。僕も勉強の合間を見て読んだらすぐ返事を書くペースで書いた。

「真へ

オーストラリアの生活はどうですか？コアラには会った？真がいなくなってから

仕事に没頭する日が続いています。もう、今の病院に来て一年になるけどすっかり

馴染んできて患者さんとも打ち解けて病室もいつも笑顔があふれているよ。

真は友達できた？学校はどんな感じなの？日本の高校とどこが違うのかな？今度

聞かせてね。

梨紗より」

「梨紗へ

日本は今春だね？こっちはこれから秋に向かうみたいだけど日本より気温が

高いよ。コアラはホストが連れて行ってくれた動物公園みたいなところで抱っこしたよ。

もう、梨紗が若葉病院で働き始めて一年たったんだね。と、言うことは僕達がであって一年経ったということだ。来年も一緒に年を越そうね。学校は慣れて友達もできてきたけど

勉強は予想以上に大変だよ。でも梨紗からの手紙を励みに日々頑

張っているよ。

仕事に没頭するのもいいけど身体には気をつけてね。

真より」

そんな他愛もない手紙のやり取りを続けて半年が経った頃これまで来ていた手紙がパタッと来なくなってしまった。毎日郵便受けをドキドキしながら覗いてはため息の出る日々が続いた。最初はただ仕事が忙しいだけかなと思いい気にしなかったが次第に不安が募っていった。

電話は留学中の規則で禁止されていたが我慢できなくなり彼女の携帯に電話したが契約が切れていて繋がらなかった。次に勤務先の病院に電話をかけた。

「はい、若葉病院、外科病棟です」

電話に出たのは僕達のことを応援してくれていた彼女の同僚だった。

「もしもし、黒木さん？僕、真です。梨紗から手紙が来なくなっている電話も通じないんですが

何かあったんですか？」

少し沈黙が続いて黒木さんはこう言った。

「真君、梨紗仕事辞めたの…」

僕はその言葉が信じられなかった。

「嘘でしょ？冗談ですよ？理由は、理由は何ですか？」

聞いても答えてはくれずに電話は切られてしまった。

その対応を不審に思った僕は学校に一時帰国の申請を申し出たが受理はしてもらえなかった。

他に真実を調べる術はなく僕は帰国を待つことになった。

第4話

―2001年12月15日―

僕は留学の全過程を終了して皆に分かれを告げオーストラリアを後にした。

梨紗とは一向に連絡のつかないままだった。連絡がつかなくなってからずっと

不安隣りあわせで生活をしていた。でももうそんな生活も終わるだろう。

帰国したらすべて真実が明らかになる。そう思いながら日本に向かった。

夕刻、日本に着いた僕は真っ先に彼女の住んでいた寮に向かった。いまだに

黒木さんの言った言葉が信じられなかったのだ。彼女の部屋の前に着いたら部屋の

表札がなくなっていた。チャイムを鳴らしても誰も出ない。

慌てて僕は病院に向かった。

病院に着いた僕は外科病棟のナースステーションに飛び込んだ。

「梨紗！！梨紗はどこですか！？」

黒木さんと目が合い黒木さんに問い詰めた。

「・・・」

問い詰めても何も言ってくれなかった。あたり一面に沈黙が続いた。そこに後ろから彼女の上司であった主任が入って来て声をかけてきた。

「真君、梨紗ちゃんのことと話があるの。ここで話すのもみんなの仕事の妨げになるから

屋上に来てくれるかしら？」

病院の屋上に移動した僕は真実を聞かされることになった。

「梨紗ちゃん、真君からの手紙読むのも書くのも凄く楽しみにして

いたの。きつと今でも

真君を思う気持ちは変わってないと思うの。」

「じゃあ、何で梨紗は姿を消したんですか!？」

僕はやや強い口調で聞いてみた。すると主任は決心したように僕の目を見て答えた。

「梨紗ちゃん：死んだの。死んだのよ、梨紗ちゃん：」

死という言葉聞いた瞬間時が止まったようにあたり一面正静寂が走った。

「梨紗が死んだ？嘘だ、そんなの嘘だ!!」

取り乱した僕に主任は涙声で言った。

「嘘じゃないの。私や彼女の同僚も信じたくないの。でも事実なのよ。」

そう言っ事のいきさつを話し始めた。

彼女は僕が留学に言った後仕事に没頭した。半年が過ぎたある日突然勤務中に

倒れた。病名は「急性骨髄性白血病」だそうだ。白血病はドラマで取り上げられることが

多く、僕も見たことはあったがドラマのように抗癌剤を投与する長い闘病生活を余儀なくされる

ような病状ではなかったそうだ。そう、発見されたときは末期で手遅れだったのだ。

それでも病床で僕に手紙を書き続けたそうだ。同僚が僕に病気のこと連絡しようかと聞いたところ彼女は

「絶対に真には言わないで。真は夢に向かって頑張ってるの。真の勉強の足手まといになんかなりたくないの」

と泣いて懇願したという。

そこまで聞いて梨紗が死んだのは本当なんだと実感した。体中が震えて涙がとめどなく流れてきた。そして屋上で泣き崩れた僕はずっと彼女の名前を叫んでいた。

「りさー!!りさー!!」

しばらく経って冷静になり始めた僕に主任は一枚のメモを手渡した。そこには彼女の実家の住所と連絡先が記されていた。

「これ、梨紗ちゃんのご実家の連絡先。ご両親には真君のことは話してあるから行くのだったら

連絡取ってから行くといいわ。私がしてあげられるのはここまでよ。あとは、真君が梨紗ちゃんの死と向かい合うの。分かるわよね？」
僕は小さくうなずき、病院を去った。

翌日、彼女の実家に連絡を取り両親と対面することになった。

そしてその、翌日実家へ向かった。彼女が生まれ育った高知県へ。

第5話

高知に着いた僕は空港で彼女の両親に迎えられた。

「井上梨紗の父です。娘から真君の事は聞かされていました。

若いのに将来のことをしっかり考えていて、娘のことをいつも

大切にしてくれる心優しい青年だと。私も今日会ってそう感じました。

娘のためにこんな遠くまで来てくれたのだから・・・」

お父さんはそう言うと言に涙をにじませた。お母さんはただ涙を流して

何か言おうとしても言葉が出ない状態だった。

僕達は挨拶もそこそこに墓地へ向かった。

無言でお父さんが運転する車から彼女の生まれ育った町並みをぼんやりと

見ていた。四万十川が流れる自然の豊かな町だった。

途中で花を買った。墓参りには場違いだが彼女が大好きなピンクのスィートピーだ。

墓地に着いて霊前に立ち線香をあげた瞬間僕のすべての思いが涙になって溢れてきた。

「梨紗、ただいま・・・。ごめんな。一人ぼっちにしちゃって。」

それだけやっと言うと梨紗が眠っている墓石にそっと手を置き涙が枯れるまで泣いた。

後ろでずっと見ていたお父さんが僕の肩に手を置いて、

「私達は家に戻っているから梨紗と二人で話さない。落ち着いたら電話くれれば

迎えに来るから落ち着くまで家にいると良い。」

そう言い残すと彼女の両親は去っていった。

それから何時間が経っただろう。辺りはすっかり日が落ちていた。僕はお父さんに連絡して彼女の実家に向かった。

夕食と入浴を済ませて両親に彼女の使っていた部屋を案内された。その部屋はまだ誰か使っているのかと思うくらい整理されていた。「私達もまだ梨紗がいつか帰ってくるんじゃないかと思って片付けられないで

いるのだよ。」

言われたとおり看護師になるために勉強して使い古された参考書なども残っている。

僕はその時思った。彼女が死んで一番辛いのは僕ではなくて一人娘を志半ばで失った家族なんだと。

「これ、梨紗が息を引き取っても肌身離さず身に付けていたものなんだが、妻とも相談してぜひ真君に持っていて欲しくて。どうかな？」

そう言ってお父さんが差し出したのは、クリスマスに買って留学前に交換したペンダントだった。

僕はそのペンダントを受け取り強く握り締めた。

そのペンダントを手に僕は翌日両親に別れを告げ高知を去った。

第6話

高知から帰ってきた僕は完全な抜け殻になっていた。

家族も心配していたが生きる気力が全くわかず

ただただ泣くかボーっとしながら過ごしていた。

彼女の後を追うことも考えた。

そんな日が続いたある日、電話が鳴った。彼女の同僚の黒木さんだ・

「久しぶり。元気にしてた？ちょっと話があるんだけど病院まで来てもらえないかな？」

「分かりました。今夜行きます。」

僕はそれだけ答えると電話を切り約束どおりその日の夜病院に向かった。病院の前で黒木さんが待っていた。

「ごめんね。急に呼び出しちゃって。真君、今日が何の日か分かる？」

と突然そんな問いかけをしてきた。

僕は分からないと答えたら黒木さんは話を続けた。

「やっぱり忘れてるわね。今日は真君の誕生日じゃない！」

これ、真君が20才の誕生日を迎えたら渡して欲しいって梨紗に頼まれたの。」

そう言うと言紙を差し出してきた。僕はその手紙を受け取って神社の境内に行つて

読むことにした。そう、その場所は僕達が付き合うことになり初めて口づけを交わした

二人の原点になった場所だ。

腰掛けて手紙の封を切り読んだ。懐かしい字だ。その手紙は紛れもなく彼女によって

書かれたものだった。ところどころ字がにじんでいる。恐らく泣きながら書いて

涙でにじんだのだろう。

手紙にはこう記されている。

「真へ

お誕生日おめでとう。真はどんな青年に成長したかな？真がこの手紙を手に行っていると言うことは私はもうこの世にはいないんだね。成人した真の姿を見られないのは凄く残念です。それに一緒にオーストラリアに行くって約束果たせなくてごめんね。私は、この世を去っても真と過ごした日々の思い出、真の優しさ、真の笑顔、腕のぬくもり絶対に忘れません。これから社会にでると色々な困難にあうこともあると思うけど私は天国からずっと見守っているからね。

一杯恋もして幸せな人生を送ってね。そろそろお別れの時間です。最後に私は真に一つの魔法をかけます。それは真が私のことを忘れて幸せな人生を送れる魔法です。目を閉じてください。1, 2, 3 っで数えて目を開けてください。その瞬間、真は新しく生まれ変わって恋に勉強に一生懸命励むようになります。

本当にありがとう。さようなら。この手紙は読み終わったら燃やしてください。

梨紗」

僕は手紙に書いてある通り魔法を実行した。目を開けた瞬間彼女の声がかすかに聞こえた。

「ありがとう・・・」

と。僕は泣きながら彼女の名前を叫んだ。

「りさあ！！」

僕も心の中で何度も謝罪と感謝の言葉を叫んだ。彼女は病気で苦しむときも僕のことを

考えていたと知って改めて自分の弱さを恥じ、後悔した。

その翌日から魔法が効いたのか僕は生まれ変わった。

途中で専門学校の入学が決まり語学の専門学校に通い始めた。

新しい生活が始まったのだ。

最終話

―2003年3月―

春の風に吹かれながら慣れないスーツを着込んだ僕は家を出た。

今日は卒業式だ。一時はどうなるかと思ったが無事に予定通り卒業できることになった。

これも、天国からの梨紗のエールのおかげだろう。

そして4月には専門学校の姉妹校に語学留学に出発した。

行き先は、そう、オーストラリアだ。

今回は僕一人ではない。梨紗の思いも背負って二人での旅だ。彼女の写真と、

誕生日にもらった手紙、そして形見のペンダントを持って。僕らのたびの門出を

快晴の爽やかな天気が出迎えた。

そして新しい生活が始まり僕は忙しく勉強に追われた。

彼女との約束は果たしたが僕の好きな場所にまだ連れて行っていない。僕は彼女を

お気に入りのビーチに連れて行き朝焼けを見ながらつぶやいた。

「梨紗、やっと二人でオーストラリアに来たね。気持ちいいだろう？」

この空気。ずっと

この景色を見せたかったんだ。これでやっと肩の荷が降りたよ。

これからは安らかに

眠ってね」

僕はそう言うのとビーチが一望できる高台にペンダントを埋めて木を立てた。木には

「井上梨紗、ここに眠る」と書いた。

そして手紙は本人の希望通り燃やしてビーチに向かって

「梨紗、さようなら。」

と叫んだ。

こうして僕のたびは幕を閉じた。

―2006年現在―

あれかな数年の月日がたった。僕は今英語の翻訳の仕事をしている。そう、梨紗に高校のとき話した職業に就いたのだ。

恋人もできて順調な人生を歩んでいる。これも彼女の魔法が効いたのだろうか。

でも、そんな彼女の魔法も一つ効かなかった物がある。それは彼女の事を忘れると言う

魔法だ。きっとこの魔法は永遠に効かないだろう。僕の心の中に彼女はずっと生き続け

ているのだから。そうこれからもずっと…。

―完―

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1480b/>

天国からのラブレター

2010年10月11日13時47分発行